

第2報 町家の住生活の実態

聖徳学園女子短大 ○叶内米子 林学園女子短大 市川啓子

目的 第1報につづき本報では、有松町の古い町家における住生活上の問題を明らかにするため、住宅の住みごころ、改造状況等について、アンケート調査と住まい方調査から実態を把握し、現代の生活に適合した町家の住まい方を定めることを目的とする。

方法 第1報に準ずる。

結果 ①「住宅の住みごころ」では、各調査期とも全体の40%前後が「住み良い」と答えている。逆に「住みごころが良くない」と答えた者は、3期とも全体の20%前後を占めている。②「住宅の住み良い点」としては、「落ち着ける」「広い」「職業上都合がよい」などがあげられ、「住宅の住みにくい点」としては、「掃除・修理等の管理が大変」「部屋の独立性が悪い」「日当りが悪い」などがあげられている。③どんな家に住みたいかという住民の希望する住宅については、「構えは伝統的な和風の落ち着いた様式を残し、内部は使いやすくする」が半数以上を占め、次いで、「近代的外住宅風庭付1戸建住宅」を希望する者が多くなっている。④現住宅を次の世代がどう扱うかについては、「全く子供の意志にまかせる。子供がここを離れてしまったくない」が全体の48.4%と最も多い。次に多いのは、「家を改築してもここに住み続けてほしい」(29.8%)、「なるべくこの状態をかせないで住みつけてほしい」はそれぞれ、10%以下になっている(1979年調査)。⑤住宅の改造状況については、台所まわりの改造が多く、「流し台を変えた」「床張りにした」「換気扇をとりつけた」などがあげられる(1971年調査)。1979年の調査でも台所まわりの改造が目立っている。全体的に工間の床張り化が多くみられる。